



中国における魂魄観の変遷：  
二元的な区別の観点を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-02-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 白, 雲飛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00002525">https://doi.org/10.24729/00002525</a>

# 中国における魂魄観の変遷

## —二元的な区別の観点を中心に—

白 雲飛（人間科学専攻文化形成論分野）

### 要約

「はじめに」では、本研究の目的と対象、先行研究及び研究方法を述べた。

従来の魂魄についての説明は後漢許慎『説文解字』を用い、「魂」を「陽」で、「魄」を「陰」で説明する傾向がある。また池田末利は「魂魄観念を説明した文として最も古いものは左傳昭公七年に見える子産の語であらう」とし、「人死すればその精神（魂）は天に昇り、その形骸（魄）は地に帰するとの信念は上代支那人の間に一般的であったと考へられる。禮記郊特性に魂氣歸于天、形魄歸于地とあるはその代表的なものである」とする。また、石川三佐男『楚辭新研究』は「漢代盛行の魂魄観（魂魄二元論）では基本的には人は死ぬと精神を司っていた魂は天に昇り、肉體を司っていた魄は地に帰す、あるいは魄は魂に従って昇天する場合があると考えられていた」と、「精神を司る魂」と「肉體を司る魄」を、「天地」と対応付けながら対比している。『新字源』によると、魂は「人の精神を主宰する陽の生氣」、魄は「人の肉體を主宰する陰の生氣」、そして「人が死ぬとはなれて魂は天上にのぼり、魄は地上にとどまる」として、「魂魄」を「精神・肉體」、「陰陽」、「天地」とそれぞれ対応させて、その意味を説明している。『大漢和辞典』も「魂」を「人の生成長育をたすける陽氣」で、「魄」を「人の生成長育をたすける陰の氣。魂が精神をつかさどるのに對して、主として肉體を主宰し、五官の機能はみな此の氣のはたらきといはれる」として「精神・肉體」・「陰陽」と対応付けている。

「天地」「陰陽」などの対比と対応付けられる魂魄観はいつ成立したか、どのように成立したか、その過程を辿りながら、「魂魄」のこのような二元的な捉え方の成立を解明するのがこの論文の目的である。

### 第一章 『春秋左氏傳』における魂魄二元的な見方の萌芽

第一章では、『春秋左氏傳』昭公七年の文について分析した。「陽」の一文字は現れているが、「陰」は現れていない。また「魂」は単独で現れ、『春秋左氏傳』の例はここだけで

ある。「陽なるものを魂と曰う」という言い方は、『説文解字』の「陽氣」と同じことを言っているように思われがちだが、「陽氣」という言葉は『春秋左氏傳』には現れていない。陰陽の対立と結びつけて「魂魄」の対比を語る箇所も見当たらない。つまり、『春秋左氏傳』の原文を素直に読むと、「魄」が「陰」と結びつけて説明されていないことから、「魄」、「陰」と「魂」、「陽」が対比されているのではなく、「魂」は「魄」の内の「陽」なる部分として「魄」に含まれていると解するのが自然な解釈に思われる。そうであれば『春秋左氏傳』の「魂魄」は「魂」を含んだ「魄」の全体を指すものと考えることができる。図で表現すれば、即ち以下の通りである。



このように、「陽」一文字が現れて、「陰」が言及されない箇所では、「魂魄」を陰陽二元論と結びつけるのは難しいだろう。さらに、『春秋左氏傳』においては陰陽だけを原理とするより、「六氣」の考えで説明されるので、なおさら「魂魄」を陰陽だけと結びつけて説明される理由が見つからない。『春秋左氏傳』においては「魂」と「陽」の対応付けがなされているだけであり、まだ「魂」と「魄」の二元的対立に至らない萌芽的な段階に過ぎないことを指摘した。

## 第二章 「魂魄」の対比と「天地」の対比の対応付け

第二章では、「魄」の文字は『禮記』において単独で用いられる例があるのに対して、「魂」が単独で用いられないことに注目した。また、『禮記』の「魂氣天に帰し、形魄地に帰す」は、「魂魄」の対比と「天地」の対比との対応関係を示すものとしてよく引用される。しかし、『禮記』において「天地」「上下」と対応付けながら、二元的に対比されるのは、「魂氣」と「形魄」、或いは「知氣」と「體魄」であって、「魂」と「魄」の対比ではなく、むしろ「氣」と「魄」の対比であることを指摘した。

さらに、「魂氣」は「骨肉」とも対比されるが、これは精神と身体の対比だと思われる。「魂氣」と「形魄」の対比はそれと同じではない。恐らく、こちらは精神的たましいと身体的たましいの対比であろう。そして、「魂氣」と「骨肉」の対比と「魂氣」と「形魄」の対比が、一見よく似た記述で表現されていることは精神と身体が対比が精神的たましいと身体的たましいへと移行する場面を示していると論じた。

このように『禮記』においては精神的たましいと身体的たましいの対比が現れ、その対

比は天地や上下の対比と結びつけられているが、それは「魂」と「魄」の対比ではなく、「氣」と「魄」の対比である事実は注目に値する。他方、『禮記』においては、この対比は「陰陽」とはまだ関係付けられておらず、この二つの点で後世の魂魄二元論的な捉え方とは一線を画している。

『淮南子』では「天」と「地」の対比と結びつけて「魂」と「魄」の対比が語られている。『禮記』では「魂」「魄」の対比が語られていなかったのに対して、ここで初めて「魂」「魄」の対比が明らかに語られている。しかし、その対比は『禮記』ほど詳しく論じられている訳ではない。しかも『禮記』に見られた精神的たましいと身体的たましいという観点での対比も見られない。また、「陰陽」の対比も「魂魄」との関係で語られていない。『淮南子』は「魂」と「魄」の対比が語られるという点で魂魄二元論的な見方に、一步近づいたと言うことができる。

### 第三章 「魂魄」の対比と「陰陽」の対比の対応付け

第三章では、後漢許慎『説文解字』と後漢班固『白虎通』における「魂魄」と「陰陽」の対応関係について考察した。『説文解字』第九篇上には「魂」を「陽氣也」〔陽氣なり〕、「魄」を「陰神也」〔陰神なり〕と、陰陽の枠組みで説明されているが、「天地」「上下」という観点での対比は見られない。同時代の高誘も『淮南子注』において「魂」と「魄」に対して、「陽神」、「陰神」という説明を与えている。こちらは「魂」も「魄」も「神」とする点に違いがあるが、「陰陽」の枠組みで分けている点では許慎と同じである。『春秋左氏傳』では、また「魂魄」と「陰陽」の対応付けは現れておらず、かろうじてその萌芽が認められるに止まっていたのに対して、『説文解字』と『淮南子注』においては「魂」と「陽」、「魄」と「陰」という形で、二つの対比が明確に対応付けられている。

このようにして、後漢に「魂」を「陽」とし、「魄」を「陰」とする見方は定着したように見えるが、『白虎通』に目を向けると、そのことには重大な疑義が生じる。

清の盧文弨の校訂に基づく『白虎通』情性篇では、「魂」は「少陽の氣」として説明され、「魄」は「少陰の氣」として説明されており、「魂魄」と「陰陽」の明確な関連付けが見取れる。さらに「魂魄」は情性と関連付けられてもおり、その対応関係は、魂一陽一情、魄一陰一性となる。

しかし、漢魏叢書本の記述には「魂魄」を「少陽之氣」と「少陰之氣」とする説明は見られない。もしこの記述がないとすると、『白虎通』にも「魂魄」と「陰陽」を直接関連付ける記述はないことになる。

しかし、この版本では性は陽、情は陰に対応するという記述があり、両版本に共通の箇所では魂と情、魄と性が対応付けられていることから考えると、「魂—情—陰」、「魄—性—陽」という関係が見て取れる。これは後の「魂陽」「魄陰」とは逆の関係である。こちらの版本は『白虎通』の古い形だと考えられるので、「魂魄」と「陰陽」の対応関係は最初はこのように捉えられていたことになる。即ち、「魂」と「陽」、「魄」と「陰」という対応関係は新しい版本のみに現れ、古い版本ではむしろ逆に「魂」と「陰」、「魄」と「陽」と対応付けられている。『説文解字』や『淮南子注』とほぼ同時代の『白虎通』において「魂魄」と「陰陽」の対応関係が通説通りでなかったことから、その対応付けはまだ定着していなかったことが分かったと指摘した。

#### 第四章 「魂」のイメージの展開

第四章では、前漢から唐までの夢の中の死者が「魂」あるいは「魂魄」として意識されたかどうかを考察した。後漢以後、死後の世界のイメージが明確化し、死後の世界には死者の「魂」がいるという考えが普及してくる。他方、身体から離れて往来するイメージは『楚辞』九章抽思「魂一夕にして九逝す」以来のものである。その影響で夢に現われる死者は、死者の世界からやって来た「魂」あるいは「魂魄」であるという考えが自然なものとなったと考察した。白居易の「長恨歌」に死後の楊貴妃のことが「魂魄曾て来たりて夢に入らず」と書かれている。否定の形で書かれているが、その背後には死者のたましいがあの世から生きた人間の夢にやってくるという考えがあったということを指摘した。

#### 第五章 「魄」のイメージの展開

第五章では、「魄」の多様な意味について考察した。「魄」の字は木の名前や、「間」を意味する場合もあり、月の満ち欠けの表現にも用いられた。これは満ち欠けする月が生まれたり死んだりする生命の働きの表現だとする解釈があるが、その妥当性の問題を考えるために月相表現としての「魄」の意味について考察した。

古い時期には、月相の輝き始めの月が「霸」あるいは「魄」と呼ばれていた。「魄」は月相表現としては、『禮記』『論衡』『白虎通』にあるように、「三日」を指す例だけであれば、特に問題は生じないだろう。しかし、『揚子法言』五百は、「魄」という言葉で「月」の明るい部分を指していると思われる。後漢張衡は「靈憲」で「月光」が太陽に照らされ

で生じるのに対して「魄」は日の翳<sup>かげ</sup>る側に生じるという見方を示し、その後月の暗い部分を「魄」と呼ぶ見方が主流となった。

結局月とたましいを結びつける考えは朱熹以前には見当たらなかったが、考察の過程で「魄」の意味の変遷が天文学的な見方の変化と関連していることが判明した。

## 第六章 朱熹の二元的な魂魄観の集大成

第六章では、まず「魄」の月相表現における意味と「魂魄」の対比における意味の関係について考察した。『朱子語類』卷第八十七「禮」で人間の「魂魄」も「月」の「魂魄」と同様に語っている。逆に言えば、「月」の「魂魄」も人間の場合のようなたましいとしての「魂魄」と見なされていることになる。このように「月」について「魂魄」の区別が語られる例は朱熹以前には見られない。「月」と「魄」の関係については古くは漢代の文献からその例が見られるが、「月」と「魂」の関係については明らかな言及が見られないのである。なぜ朱熹において「月」と「魂魄」が結びついたのかを考えるためには朱熹の見方を全体として理解する必要がある。

朱熹はすべてを「氣」として捉えているが、「鬼神」にしても「魂魄」にしても同様である。『禮記』の中で「魄」と対照されていたのは「氣」であるのに対して、朱熹は「氣」を「精」と対比し、「魄」を「魂」と対比している。朱熹は『禮記』の見方を受け入れ、さらに『禮記』の古注の考えも取り入れて、それを彼独自の世界観、魂魄観の中で位置づけようとしたのである。

朱熹は「耳目鼻口の類」の働きである「知覚」を「記憶」と共に「藏受」として「魄」の働きと見なしている。他方「氣の呼吸」は、この箇所の表現を借りれば「運用」として「魂」の働きであることになろう。即ち、朱熹は「魂」「魄」をものの対比としてだけでなく、働きの対比からも考えている。このように「魂」と「魄」の、ものとしての対比と働きの対比という二通りの見方が現れることは朱熹の魂魄観における大きな特徴であると思われる。それは、物事を「一氣」と「二氣」で捉える彼の見方に基づくものだと考えられる。

朱熹はすべてを「陰陽」に基づいて、「二氣」と「一氣」の観点からものや現象を区別する。この見方は天地万物、日月にも適用されている。例えば「天文」と「地理」が「陰陽」二氣によって、ものとして分けられ、さらに「天」の方が「昼」は「陽」、「夜」は「陰」と分けられるのは「一氣」による区別である。このような「一氣」と「二氣」の区別は「日月」と「魂魄」の関係にも適用される。「日月」を「二氣」で見る場合、「日」

は「魂」、「月」は「魄」で、ものとして区別されるが、「一氣」で見る場合は「月」のうちの「暗処」と「明」が区別され、その「暗処」を朱熹は「魄」と呼んでいる。つまり、ここでは「日月」の「月」は「陰」で、「魄」であり、同時に、「月」のうちにも「陰陽」があつて、太陽に照らされていない部分、所謂「暗処」が「魄」として扱われているのである。

このような朱熹の見方は彼以前の魂魄観の集大成という意義を持っていることを考察した。例えば、『春秋左氏傳』そのものには、「陰」と「魄」の対応は現れていなかったが、朱熹は『春秋左氏傳』の言葉も「魂魄」や「陰陽」の対比の中に組み込んで解釈している。『春秋左氏傳』の中に「魂」「魄」を「陰陽」で対比する考えを読み込む見方があるが、それは朱熹のような視点から解釈された『春秋左氏傳』であつて、『春秋左氏傳』そのものではないと言える。

また、『禮記』郊特牲第十一では「魂氣天に帰し、形魄地に帰す」と、「天」と「地」の対比と対応付けながら「魂氣」と「形魄」を二元的に対比している例があつた。この箇所を引用しながら『朱子語類』卷第三「鬼神」「人將死時、熱氣上出、所謂魂升也。下體漸冷、所謂魄降也」〔人將に死なんとする時、熱氣は上に出づ、所謂魂升るなり。下體は漸う冷めゆく、所謂魄降るなり〕という説明を加えている。『禮記』においては祭祀との関係で、死者を祭ることが念頭に置かれていたのに対して、『朱子語類』は、人が死ぬ時に「魂」は「熱氣」として上昇し、「魄」は「下體は漸う冷めゆく」という形で「降る」と説明している。即ち、「魂」「魄」は「熱」「冷」の対比と結びつけられ陰陽の枠組みの中に位置付けられているのである。

朱熹は『禮記』から影響を受けただけでなく、後漢鄭玄の『禮記』に対する「注」からも魂魄観に関する新たな洞察を得たように思われる。鄭玄は、『禮記』の「氣」と「魄」について、「氣」を「嘘吸出入するもの」とし、「魄」を「耳目の聰明」つまり「耳」と「目」の機能として説明する。朱熹は、これを「魂」と「魄」の説明に用いている。朱熹は鄭玄の「魄」の見方をそのまま受けついでいるが、「氣、嘘吸出入するものを謂うなり」を「口鼻の嘘吸は魂と為し」と言い換えている。また、「魄是耳目之精、魂是口鼻呼吸之氣」〔魄は是れ耳目の精、魂は是れ口鼻呼吸の氣〕とも表現している。

ここでは「耳目」と「魄」、「口鼻」と「魂」が対応付けられているように見えるが、別の箇所では「氣の呼吸するもの」を「魂」とし、「耳目鼻口の類」を「魄」としている。先には「口鼻の嘘吸」或いは「口鼻呼吸の氣」という言い方で「魂」と結びつけられていた「口鼻」が、こちらでは「魄」とされている。前者の引用で「口鼻」が「魂」と結びつ

けられたのは「呼吸」の器官としてだと考えられるが、後者の引用では「耳目」と共に「知覚」の器官として扱われている。従って、ここでの対比が「呼吸」と「知覚」という働き間の対比であると考えれば、「口鼻」が「魂」の側にも「魄」の側にも現れることは、決して矛盾とは言えない。即ち朱熹の魂魄をものとして区別する見方と働きの点で区別する見方のうちの後者は朱熹が鄭玄の説明から発展させた見方であると考えられる。

従来、魂魄二元的な考え方は漢代からあると一般に考えられてきたが、本論文で見えてきたように、区別の観点は文献によって断片的で、全体的な関係は明らかでなかった。それに対して朱熹は、これらの見方をすべて彼の魂魄観に組み込んでいる。彼がこのように総合的な説明をすることができたのは、彼の見方が陰陽の区別を基本として天地万物を対比の観点で整理するものだからと考えられる。そして、これらの万物を「陰陽」の観点から単にものとして区別するだけでなく、さらに区別されたものを働きの観点でも区別している。「月」を「魂魄」と結びつける見方は、そのような朱熹の総合的な魂魄観を反映した考えの一つである。

## 本研究の結論

このように、朱熹はさまざまな二元的な見方をその魂魄観の要素として組み込み、さらにその魂魄概念を天地万物にまで広げて適用した。ここから逆に見ると、古代においては「魂魄」について「陰陽」「天地」「上下」などのすべての観点から二元的に対比する見方はなかったという事実が浮かび上がる。

本研究は周代から清までの文献を広く考察したが、時代によって考察が手薄になったところがあることは否めない。特に仏教が伝えられたことが魂魄観の変遷にどのような影響を与えたかについては考察することができなかった。また道教や医学の中でも魂魄観念が重要な役割を果たしていることは知られるが、それについても本論文に取り入れることは出来なかった。これらの問題については今後の課題としたい。